

## 紀友会例会堀口スピーチ案

本日ご出席の「紀友会」の皆様は和歌山県の御出身の方々とお聞きしておりましたので、串本町のことはよく御存知のことと思いますが、少しでも紹介させていただきます。

本州最南端に位置する串本町は、平成17年4月1日に旧古座町と旧串本町が合併いたしました。面積は約135平方キロメートル、東西約25キロメートルと広くなりました。しかし合併当時20,826人あった人口が、平成22年4月1日現在では19,128人と5年間で約1,700人の減となり、少子高齢化等に伴う過疎化が当町にも確実に進んでいるのが現状であります。

また、串本農協が紀南農協に、古座農協がみくまの農協に、漁協も東牟婁郡内10漁協が合併し和歌山東漁協に、古座町・串本町商工会が串本町商工会になるなど町以外でも合併が進んでいます。

当町は昔から漁業の町といわれてきましたが、昭和53年に串本本土と苗我島の間には640Mの防波堤が完成し、新しく内海に養殖漁場ができました。当時の故塩津町長はこの堤防を造る際に大島への夢のかけ橋の構想も持っていたと言われており、平成11年9月に開通した串本・大島を結ぶ「くしもと大橋」の一部にこの防波堤が利用されています。

浅海養殖漁場が整備されてから、獲る漁業と育てる漁業の二本立てで漁業が営われてきました。しかし近年漁獲量が減少し、串本魚市場の水揚量が平成10年に4,981トンあったのが、平成20年では3,913トンに、約1,000トン減少し、水揚げ高も15億5千万円から11億5千万円に4億円減少しています。また養殖はハマチからマダイに移り代わりましたが、餌代の値上がり、販売単価の値下がり等で採算がとれず約半数が廃業をよぎなくされているのが現状です。

しかし、近畿大学の本マグロの完全養殖の成功もあり、最近では本マグロやクエなど高級食材の養殖に切り替えており、マグロ養殖の企業誘致の話も進んでいます。

その漁業に代わって今力を入れているのが観光産業であります。観光も橋杭岩や潮岬の景勝地を見る観光から、自ら参加し体験する観光に変わってきておりまして、特に今人気のあるのは、平成17年11月に世界最北限のサンゴ群落がラムサール条約に登録された海域でのスキューバダイビング、それから清流古座川のカヌー下りや大島湾でのマグロの餌やりなど、自然や漁業を活かし

た体験型観光であります。

そこで これらの自然体験や漁業体験をセットにした新たな事業として、平成20年度から修学旅行生の民泊事業を本格的に始めました。

この民泊は 田舎のおじいさん、おばあさんの家に泊まりにくる感覚で 気軽に来てもらい、昼はきれいな海や川で、都会では味わえない豊富な資源を活かした体験型学習を行い、そして夜は民家への宿泊と、地元でとれた魚などを使った田舎料理造りを体験する仕組みです。最初は受ける側も不安がありましたが、後日お礼の寄せ書きなどが届くと、又次は どのようにして持て成そうかと張り切るようであります。当初は修学旅行も1校だったのが、今では13校になり、串本を訪れる生徒さんの数も5000人を超すようになりました。その中には海の無い埼玉県の高校のように毎年来てくれる学校もあります。

串本町はこれからも和歌山県の先進地として、きれいな海や川を大切に守り、豊富な自然と一次産業を組み合わせた新たな体験型観光施策に取り組んでいきたいと考えています。

また県内町村では、今年度から本格的に白浜町の日置川地区やみなべ町でも民泊事業に取り組むような話を聞いています。

そして福祉部門では、合併時の町民の要望が1番多かった新病院の建設が23年12月開院に向け 現在入札も終わり、津波の心配の無い高台に建設が進められ 安心して暮らせる町づくりの新たなスタートをきりました。

以上、簡単でございますが串本町の紹介とさせていただきます。

それでは本題の「日本とトルコの関係」について、まず一部として私がエルトゥールル号の遭難にまつわる話をさせていただきます。トルコ航空機によるテヘランからの救出については、二部として森永氏にお願いしています。

なお、私の話は串本町史掲載内容と地元檜野地区の方々にお聞きしたことをまとめたものでございます。また人物名については既になくなっている方々でございます。

#### 日本への特使派遣

小松宮殿下・妃殿下が1887年(明治20年)にヨーロッパ歴訪の際、イスタンブールを訪問しトルコ皇帝に謁見されました。それを受けてトルコ皇帝アブデュル・ハミット二世は明治天皇に親書と最高勲章を贈呈し日トの修好親善を図るべく、特使オスマン・パシャを日本へ派遣することを計画しました。

その使節団の乗艦は、木造の巡洋艦エルトゥールル号(排水量2344トン)と決定しましたが、同号の決定にはトルコ海軍内でも異論があったようです。蒸気釜が古く1時間8海里から9海里以上の速力を出すことが出来ないような

老艦であったからです。つまりエルトゥール号は、日本への長い航海に耐え得るような艦艇ではないと、専門家の意見があったようです。しかし、それを無視し、1889年（明治22年）7月15日イスタンブールを出港、地中海・スエズ運河・紅海・インド洋を通過し、途中シンガポールや香港など主だった港に停泊し、回教圏の人々にオスマントルコの権威を誇示しながら、また船の修理をしながら横浜へ入港したのは翌年の6月7日でした。実に11ヶ月を要したのろのろ航海だったのがわかります。

日本についての使節団は、天皇・皇后両陛下に拝謁し、ハミット二世からの親書と勲章を天皇に捧呈し、オスマン・パシャ提督は明治天皇より勲一等の勲章を受けました。

### 悲劇の老朽艦

使節団は無事任務を果たし、朝野を挙げての歓待を受けておりましたが、当時丁度横浜にコレラが発生し、何人かの乗組員も感染し命を落とす者もいました、そのためなかなか帰途の許可が下りず、約3ヶ月後にやっと出港の許可がありました、エルトゥール号は、すぐさま1890年（明治23年）9月14日午後1時横浜を出港、最初の寄航地神戸に向かうことになりました。日本の9月は台風シーズンでありましたが、コレラの件もあり早く帰途に着きたいという思いもあってエルトゥール号は出港しましたが、その時台風が日本列島に近づきつつありました、当時は詳しい気象情報もなく、トルコ人も台風の知識があまりなかったと思われます。知識があれば、伊勢湾や鳥羽などに停泊もできたはずですが、老艦のエルトゥール号は横浜をでてから、しだいに高まる浪や風と戦いながら50時間かけてやっと串本町大島の沖にさしかかりました、その頃はもう風が強くなり海も荒れ模様になり、やがて山なりの大波にもまれエルトゥール号は進退の自由を失ってしまいます、エンジンを全開にしても大波に翻弄され、ぐんぐん檜野埼灯台下の船甲羅の岩礁へと押されて行く外はなかったのです。

熊野灘を吹きすさぶ台風の猛威になすすべもなく、ついに船甲羅の岩礁に激突、一大音響を残して海の藻屑と消えたのであります。時刻は午後8時から9時頃だったと言われています。

### 檜野区民の義挙

同夜10時すぎに檜野埼灯台の入り口の戸を激しく叩く音がして、灯台守が戸を開くと、血だらけの一人の外人が立っており、続いて二人、三人と姿を現し、またたく間に十人ほどになり、応急手当をしながらどこの国か訪ねましたが言葉が通じない、そこで万国信号ブックを示したら、トルコ国旗を指したの

で、ようやくトルコ人と分かりました。そこで滝沢技師は直ちに灯台守を檜野の集落へ走らせ、区長に外国船の遭難を知らせました。

これより先、私の曾お爺さんに当る高野友吉はその夜灯台附近の海上に一大爆発音のあがるのを聞き、これを灯台に知らせようと駆けつける途中、服が破れ血だらけになった外国人がふらふらと歩いてくるのに出会いました、その時友吉は思わず腰に差していたナタに手をやり強く握りしめたと聞いています。友吉はその外国人を斉藤区長の家につれていき、区長が小林医師を呼んでこいと友吉に命じているときに、灯台からの知らせも届き、区長が只ならぬ事態と直感、負傷者が大勢いると予測して、半鐘を鳴らし区民に知らせ 男達を集めるよう友吉に命じました。

深夜で、暴風雨で、それはもうたいへん悲惨な有様でしたが、男達はひるむことなく救助に立ち向かいました。

「まず生きた人を救え」と海水で血を洗い、ヘコ帯で包帯をし、自分よりかなり大きな水兵を帯で背中におんぶし、地元で「コヨチの浜」と言われている海岸から、無我夢中で約40メートルの崖を這い上がりました。そして人しか通れない細い道を1キロ以上はなれたお寺へと運びました。負傷者はお寺に入りきれなく小学校にも収容し、小林医師が治療に当たりました。

また暴風雨のため火も起こせないで、男たちはトルコ人を腕に抱き、人肌で温めて介抱に当たったといわれています。

夜が明けてきて、付近を探索してみると崖下の海岸には負傷し助けを求める水兵やすでに死亡して打ち上げられた者もかなりありましたが、男たちは息のあるトルコ人を先に助け出しました。

このようにして夜から朝にかけて救助したトルコ人は69人に達したのであります。

斉藤区長は、大島村役場にこの事件の急を告げました。沖村長は郡役所と県庁への報告の処置をし、すぐに檜野に駆けつけ指揮をとりました。そして生存者の代表をしかるべき外交機関に送り、実情を報告することが目下の急務であると判断しました。

そして、台風を避けて大島港に錨をおろしていた外国航路の経験のある少し英語が分かる船員が乗っていた商船の船長に頼み、比較的元気な2名のトルコ兵士に役場職員を随行させ 17日夕方神戸に向けて出港してもらいました。

#### 負傷者の看護

現在檜野地区は約140戸ありますが、その当時は60戸ぐらいだったといわれています。檜野区民は全区を挙げて衣食を提供しました。

それぞれの家から差し出した浴衣をトルコ人に着せると、トルコ人は体格が

よく浴衣の丈が膝までしかなかったと言われていました。

食の方はと言えば、当時の檜野は半農半漁でありましたが、水田は乏しく米は貴重な食料でありました、しかし蓄えていた米は負傷者に全て提供し、米がなくなると畑からサツマイモを掘ってきて提供しました。また体力を付けさせるため、非常食用に飼っていた村中のニワトリが集められました。私の子どもの頃でも、大敷と言われる定置網で水揚げされた魚は豊富にありましたが、ニワトリは貴重なタンパク源で、卵は食べさせてもらいましたが、鶏肉は正月でなければ食べさせてもらえなかったのを記憶しています。

食料が集まるにつれて、女達は炊き出しをはじめ、貴重な米で握り飯を作り負傷者に食べさせました。ニワトリの料理は檜野文衛門が担当しました。彼は明治3年初点灯の日本最古の石造り灯台である檜野埼灯台の建設に携わったイギリス人技師に料理人として雇われていた檜野地区でただ一人のコック経験者でした。そして、イギリス人技師からもらった鉄なべとフライパンをもってきて、鶏肉料理に腕をふるったと言われていています。しかし、69人分の食料は底をつき、斉藤区長は隣村の須江や大島地区にも救援を頼んでいます。大島には現在も大島・須江・檜野の3つの地区があります。檜野が一番小さな地区であったため、各戸の家には一羽のニワトリも一粒の米もなくなり、台風で魚も獲れない状況であり、自分たちの食料も無くなりましたが、不平不満を言う者が一人もいなかったと言われていています。

また、650余名乗船していたといわれていますので、亡くなられた方も相当でしており、島内の三区の住民を動員し、遺体の収容作業に着手しました。沖村長はすべての遺体を新調した棺おけに収めるよう配慮し、檜野崎の高台に葬りました。

遺体は隣の村や本土の村などにも漂着し10月に入っても収容作業が続きました。そうした懸命の捜索により285名の遺体を収容しましたが、他の水兵達とともにオスマン・パシャ提督の遺体はとうとう発見されなかったようです。

9月26・27日の両日には、長崎県のダイバー平井好太郎氏が潜水調査を申し出、三輪崎村の水夫らの協力を得て沈没地点に潜っています。そしてエルトゥールル号の船体を確認し、日本刀やサーベルなど数々の遺留品を引き揚げました。また金銀の貨幣等磯辺にうち寄せられた物もかなりありましたが、こうした拾得物は私有させることなくすべて詳細に記録のうえ役場に保管し、のちに貴重品はフランス商船に託してトルコ国に送還しています。

#### 生存者の移送

9月20日には、急報を聞いた兵庫県が生存者移送のためドイツ軍艦を派遣してくれました。2人のトルコ人に随行していった役場職員もこの船で大島港

に戻りました。

そして、2人のトルコ軍人を残務処理のため島に残し、65人をドイツ軍艦に乗せ、神戸に向け午後1時出発しました。樫野崎の洋上では汽笛を鳴らし、祖国に帰れなかった乗組員に弔意を表しました。

負傷者は明治天皇が派遣した医師と看護師により神戸で治療を受けた後、日本政府が派遣した金剛・比叡の二艦に分乗し10月11日にイスタンブールに向け神戸港を出港しました。そして翌24年1月2日にイスタンブールに無事着きました。

ちなみにこの金剛・比叡は海軍兵学校の練習艦であり兵学校卒業航海も兼ねておりました、昨年11月にNHKのスペシャルドラマで放映された司馬遼太郎の「坂の上の雲」での主人公の一人、秋山真之（さねゆき）がこの比叡に乗艦しています。海軍兵学校の成績の上位から奇数が比叡に、偶数が金剛に乗船したといわれておりました、秋山が首席であったので比叡に乗艦したのです。

また、秋山が、このとき親友であった正岡子規に、トルコ人生存者を送っていく途中の長崎と、イスタンブールについた時にと、2枚のハガキを送っているのが最近見つかっています。イスタンブールは1月1日付けの年賀状です。

記念碑の建立と日ト親善　　ここから人物名が現在の方になります。

この翌明治24年3月、和歌山県知事はじめ、有志の義金により墓碑と慰霊碑が建立され、追悼祭が行われました。

この出来事を知った日本全国から義援金が寄せられ、そのお金をすべて山田寅次郎氏等によりトルコの遺族に届けられました。寅次郎氏はトルコ側の要請により、そのままトルコに留まり、日本語を教えるとともに、日本とトルコの親善に尽くされました。

また昭和4年の昭和天皇の樫野崎行幸を聞いた、トルコのケマル・アタチュルク初代大統領が新しい慰霊碑を建てることを決め、昭和天皇の行幸8周年記念日に当る昭和12年6月3日に序幕の日を迎えています、この慰霊碑の地下には納骨もされており、今日もなお熊野灘沖を行きかう船舶を見守るかのように、樫野崎の丘にそびえ立っています。また同じ慰霊碑がトルコ共和国メルシン市にも建てられています。そして、地元の小学生や老人クラブ等が毎年慰霊碑の清掃活動を続けていますし、町民の有志で9月15日には無量寺で法事と16日には碑へのお参りも行われています。

また最近、串本の無量寺から古文書が見つかりました、この古文書には、当時事故が落ち着いてから、日本政府から治療に当たった3人の医師に薬代や治療代を国が支払うから請求しなさいとの通知がきましたが、これを受け取った3

人の医師たちは、私達は治療費を頂くために治療したのではありません、治療代は結構ですからそのようなお金があるのなら、生存したトルコの方々に上げて下さいと書かれていました。離島の小さな村で食糧や薬等も乏しい、このような困難な状況にありながら、何の名誉も見返りも求めることなく、ただ目前の人々を救おうとした先人達の勇気と誠意をあらためて知らされ、頭の下がる思いがいたします。

以上、述べましたエルトゥールル号船員の救出から、イラン・イラク戦争時のトルコ航空機による日本人救出に繋がっていきます。

この事故がきっかけで、串本町とトルコ共和国の地中海に面したメルシン市、樫野崎の海岸風景がよく似ていると言われている黒海に面したヤカケント町との姉妹都市提携も結ばれ、青少年の交流事業等が現在も行われています。

そして、5年毎にとり行われているエルトゥールル号の追悼式典は串本町・和歌山県・トルコ共和国の主催で100周年まで行いました、100周年を機にエルトゥールル号追悼式典だけでなく日本とトルコの友好式典も合わせて執り行っていくことになり、和歌山県の協力と、串本町・トルコ共和国の共催で実施しています。また、本年は日土友好120周年事業として、三笠宮家から寛仁（ともひと）親王殿下とご令嬢の彬子（あきこ）女王殿下をお招きし 6月3日に慰霊碑の前で追悼式典を執り行い、4日から6日にかけてトルコ映画の上映、海上自衛隊呉音楽隊コンサート、シンポジウム等を予定しています。このシンポジウムには、映画監督の田中氏や、本日の講師でもある森永氏にも出席していただく予定になっていますし、来る5月29日には田中監督を招き、串本、文化センターで映画「火天の城」の上映と監督の講演会を予定しています。またトルコ国から新潟県柏崎市へ寄贈された トルコ建国の父アタチュルクの銅像が、地震のため閉鎖されたテーマパークで放置されていましたが、トルコ大使館や日本財団のご協力により、今回エルトゥールル号が沈没した海に見える串本町の樫野崎に設置されることになり、6月3日の式典の前に除幕式を執り行うことになっています。

さらに今年は、「2010年トルコにおける日本年」と題して、日本文化の紹介やイベントがトルコ国内で催されており、9月にはトルコメルシン市でも串本町から関係者が出席しエルトゥールル号の追悼式典を執り行う予定です。

私も、本年1月4日トルコ共和国アンカラ市で、日本から岡田外務大臣、トルコからギュナイ文化観光大臣等を招き開催されましたオープニング式典に招待され、串本町樫野区民の代表としてスピーチを行ってきました。

スピーチの中で「樫野区民はどこの国の船であっても同じことをしたと思いますが、トルコの人々はこのことを120年たった現在でも忘れることなく、

串本町のこと日本のことを親しく思っただいて、むしろ感謝申し上げるのは私たちの方です。」と申し上げましたら大勢の参加者から暖かい拍手をいただきました。

現在串本町では皆様にお配りしている資料のとおり、「火天の城」映画監督田中光敏氏、NHK大河ドラマ「天地人」脚本家 小松江里子氏による「エルトゥールル」(仮題)の映画化に取り組んでおります。

見返りを求めず、無心に異国人の救助にあたった 当町檜野の先人達が残してくれた大きな愛を、そして 永く語りつぎ恩返しをしてくれたトルコの人々の深い愛を全国に伝え 現在の日本人が忘れかけた心を 映画を通して訴えたいと思っておりますので 重ねて皆様のご支援、ご協力を 町長にかわりお願い申し上げます。私の話を終わらせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

串本町の貧しい小さな村の人達が、悪天候にもめげず日本の侍魂でトルコの水兵達を救助にあたりましたが、これは特別なことをしたわけではありません、人間として当たり前のことをただけです。

串本町民も日本国も、何の見返りも求めず、無心に異国人の救助に当たったこのことがきっかけで日本とトルコとの120年の絆ができたのです。

串本町では、この内容を映画に記録し、日本・世界の方々に見ていただき、人間としての心の原点をもう一度見詰め直していただきたいと、町おこしもかねて映画製作に取り組んでいますので、皆様のご支援、ご協力をよろしく願います。